

京 都 府 上 羽 広 義

「村上さん、さようなら。」

大阪で開催された「全低肺」総会が無事終了した。各府県から参加した代議員諸氏は帰途につくべく、会場の市立労働会館を後にし、JR及び私鉄の駅へと歩き始めた。その中にカートを曳いたやゝ小柄な婦人が並んでいた。「どこから参加でしたか」「仙台から・・・」へえー随分遠方からはるばる大阪まで、とちょっと驚いたことを覚えていた。

会館構内を出て街路に向かえば、大阪特有の雑踏で、しばらくすれば散り散りバラバラ、仲間の姿は知らぬ間に見えなくなつた。今を去る十数年前のことである。

その後、数年間総会が開催される毎にお目にかかり、議事の時間討議を共にさせてもらい、会を重ねる都度、村上さんの発言は舌鋒は鋭くなり、問題の核心を衝いて頼もしくなりました。

東北白鳥会会長として多くの会員を束ね、国会・県会への陳情等、病身を省みない活動で重責を全うされてる方と映り、以前仲間の一人が「東北の地に女傑あり」と申していた、その言葉に更に納得したものでした。

近年來体調がすぐれないと仰言つて案じていましたところ、この度の訃報を受け取り大変ショックでした。患者を取り巻く情勢も厳しい中ですが、村上さんの遺志を継いで引き続き精一杯生きて行きます。

黄泉路からどうか見守っていて下さい。深く哀悼の意を表します。

東 村 山 市 久 保 隅 哲 彦

貴会会長 村上きみ子様 ご逝去の報に接し心からお悔やみ申し上げます。

村上様は、呼吸機能障害者の福祉のために、地元宮城県下だけでなく、全国の有志に呼び掛けては、ご尽力下さいました。深く感謝いたしております。

在宅酸素吸入療養中の私も何度か直接お電話を頂き、その情勢分析と狙いどころに感服いたし、勇気を頂いておりました。惜しい人を 失ったことが残念でなりません。

年齢的にも体調からも 私たちの年代はもう去ってゆかざるを得ないのかもしれないかもしれません。そして、新しい時代の芽が伸びてゆくことを念じるのみです。

ご冥福をお祈りいたします。

”み魂やすらかに”

今年の春に三十五年連れ添った妻に先立たれた。末期の膀胱ガンで余命いくばくもないと知った日に、何故か村上さんに電話した。村上さんは「国立病院の消化器科は自分が診て貰っているところよ」と言っ、わざわざ妻の病室まで見舞いに来ていただいた。

それから二ヵ月後、その知らせは信じられないの一言だった。考えて見れば彼女は病身であり、相当弱っていた訳で、いつ倒れてもおかしくなかったのに、それを感じさせない強さがあった。明晰な頭脳と強靱な使命に燃えた意志の強さを常に感じてきた。

自分が彼女を知ったのは、平成元年に尺八のリサイタルをする時に、たまたまた夕刊で低肺の記事を目にし、お電話して以来のお付き合いである。何回かチャリティーの会を開かせていただいたが、彼女のアイデアやアドバイスにいつも助けられ、励まされてきた。

どちらが健常者か判らない位、頭だけでなく体まで精神的に動かし、ついには行政まで動かして目的を貫いてきた。まだ彼女にとっては道半ばかも知れないが、まさにすべてを投げうって自分の死を身近に感じながら「白鳥会」に打ち込み、燃え尽きた尊い命であったと確信します。彼女の魅力的な笑顔がいつまでも私の心に記憶され、その魂が自由を得、安らかに天空に飛翔されますことを祈ります。

”白鳥や 水面をわめき、空はるか”

仙台市 M・I

会長さんがお亡くなりになられた知らせを聞いて、本当にびっくりしました。

水曜日に福祉プラザに伺うといつもニコニコと私の身体を気遣って下さいました。

平成七年主人を亡くし看病疲れと悲しみにくれていた私を慰めて下さり、長い間一生懸命看病した事で、会長さんのお計ら

いで、平成九年内助功勞者として身に余る表彰を受けました。白鳥会の活動に加えて頂き、知事、市長の陳情に同道した事もありました。低肺患者のみならず障害者の苦勞を訴え続ける姿に胸を打たれました。二十年もの長い間本当におつかれさまでした。どうぞ安らかに眠り下さい。

米沢市 小野瀬 淑子

“今日も亦暑くなるべく予期すれば鳴き始めたる朝の蟬”

村上会長・・・貴女の心の杖を支えとして、死ぬほど苦しくとも、絶えに絶えて、一日一日を大事に、明日と言う日に一途の灯の命を託して頑張っている会員を残して、貴女は貴女は神に召されてしまったのね。何て神は無情すぎます。

貴女は、自分の身を削り乍らも会のため、そして会員のために山積する難題を孤軍奮闘して解決して行く、その信念の強さに只々敬服しておりました。市会・県会そして国会までも、何事も恐れず切迫した態度で陳情に望むあの姿には「会長はずこい」の一言につきました。どなたにも真似の出来ないあの情熱の持ち主、涙の出るほど深く心を動かされました。会長の残した偉大な足跡は後々にも語りつがれる事でしょう。

会長、疲れたでしょう・・・苦しくて辛かったですでしょう・・・ようやく辿り着いた安らかな場所。そして平成十四年九月一日に亡くなりました小野瀬蘇風と、語り尽くせぬほどに報告していることでしょう。小野瀬と二人で会の発展を陰ながらお祈りして、お別れの言葉と致します。

村上さん御冥福をお祈り申し上げます。

仙台市 渡部 軍司

この度は、村上会長の突然のご逝去を知らされ、驚きと悲しみに言葉もありませんでした。何時も、精力的に「白鳥会」一途に活動する村上さんの姿は、私の頭から消え去る事はありません。

福祉プラザに出向くと、エレベーターの中で「軍司さん、仕事は順調？」と声が聞こえて来るようです。

丁度一年前、私は考える事があり、お世話になった「啓生園印刷部」を退職しました。私の出身地、神奈川県で学んだ「在宅障害者就労支援活動」をこの宮城県、それもまず仙台市で実現するつもりでした。授産施設・福祉工場・訓練校等で印刷の技術を身につけて、あのバブル時に就職した（私の紹介）仲間たちが、不本意にも退職して自宅を仕事場として細々と印刷の仕事をする障害者に、私が営業で集めた仕事を分散した熟達した技術を持つ仲間が行う、神奈川県では「家庭授産」と呼び、私が仙台に来るころは活発に活動していました。もう二十年も前のことです。

施設での二十四時間、授産作業・生活と規則に縛られる毎日、部屋も四人の生活とプライベートは守られません。結婚も儘ならず、まず、これを解決する必要もありました。また既に結婚し子供も高校・大学を考える時期に来た仲間も居りました。また、さとう宗幸さんも応援して呉れますし、技術一〇〇%以上の熟達した仲間五人と準備し「五人の会」を結成しましたが、この活動を聞いた障害者から参加の希望も多く、現在十三名に拡がりました。この中には、西多賀病院の筋ジスの患者やありのまま舎の仲間も入っています。村上さんには、数カ月前に電話で報告をしましたが、急激に仲間が増えた事を報告も出来ず残念でなりません。

仙台での十三年間のお付き合いでした。村上さんには良く注意を受けていました。私が啓生園時代「白鳥会」さんの担当の時期も六年位でしょうか、その後、斉藤・大場と続き若い二人には勉強になった筈です。教えて頂く事も多く、同時に心配もして下さいました。私が現在の仕事をスタートさせた時は、啓生園を辞めて大丈夫なのか？と、あの時は私の母親に替わって心配しておりました。もっと、村上さんに怒られながら、この仕事（印刷・デザイン・ホームページ等）を発展させて行く時期でしたのに……

NHK 黒岩 史成

村上さんがお亡くなりになったとの知らせを受けたいへん驚きショックを受けております。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

村上さんとお会いしたのはたしか昭和五十九年か六十年だったと思います。村上さんが、仙台で開かれる胸部患者の学会について問い合わせられて、併せて、知られざる低肺患者の窮状を訴えられたのが最初でした。

その実情に驚かされ取材を始め、東北地方に向けて一〇分の番組を放送させていただきました。村上さんはテレビに出る事を嫌がっておられました。が、「あなたが顔をさらしてでもその現実を訴えなければ、事態は変わらないのではないのでしょうか」と説得して、取材に応じて頂きました。それからは村上さんは臆することなく、むしろ自分を犠牲にしても、取材に答下さり何度となく低肺の実態について放送することができました。この間の事情は機関誌「白鳥」の当初の号に寄稿させて頂きましたのでご参照下さい。

その後のことも書き始めれば長い時間を要することであり、改めて書き送るようになさして下さい。八月十九日に追悼の会が執り行われるとのこと、事情が許せば、せひとんで行って皆様にお話をさせていたがたいところですが、明日(十日)アテネに向け出発しなければならず断腸の想いです。現在NHKのスポーツ報道の仕事をしており、アテネオリンピックの取材指揮をとるため現地に向かいます。今回は出席できませんが、アテネから帰りましたら九月二十日から二十一日にかけて、お墓参りに伺うつもりです。どうかご容赦ください。

低肺について村上さんからご教示いただき制作した一〇分の番組が収録されたテープをお送りします。その後何回か取り上げたものも入っています。皆様でご覧頂ければ幸いです。最初の一〇分の番組が私にとっても或いは東北白鳥会にとっても、記念碑となるものだったのでないかと、いまでも思っております。

帝人在宅医療東日本(株)

仙台営業所 所長 西島 正美

私が村上さんに始めてお会いしたのは、三年半前に前任の所長に連れられて、村上さんのご自宅にご挨拶に行った時でした。その時の村上さんの印象はすごくエネルギーが豊富な方だなと感じました。ワープロに向かわれて原稿執筆されながら、いろいろとお話したのを思い出します。

それから、約三年半の間、毎年の白鳥会の総会の他、いろいろのお付き合いをさせていただきましたが、最初にお会いした印象以上に実際はもっとすごい方だと感心させられました。特に、去年のパルス助成制度の実現を達成された時は、村上さんのパワーと情熱の強さを実感しました。

先日のご葬儀やお別れ会で、村上さんのご経歴を改めて拝聴しましたが、本当に貴重な方が亡くなられたんだと残念でなり

ません。もっと長くお付き合ひさせていただき、いろいろな勉強をさせて頂き、また私共、帝人も微力ながらもっと村上さんのお役にたちたかったと痛感しております。

今後は後任の渋谷会長様を始め、白鳥会の皆様が、白鳥会の運営に努力された村上前会長の強い意思を受け継がれ、低肺患者さんの為に、白鳥会が益々発展されますことを祈念いたしまして、追悼の文とさせていただきます。

岩城音楽教室

岩城 美和

”村上さんの思い出”

一九九〇年の春、白鳥会のボランティアをしていたお婆から「低肺患者さんの歌“明日への空へ”が出来たのだが、患者さんは歌えないので、代わりに歌ってもらえないだろうか」という電話が来ました。

私は数週間後に初めてのリサイタルを控えており、他の曲を歌う精神的な余裕が無い時でした。内心困ったなと思いながら、「自分の好きな歌が人の役に立つのなら」と、「低肺」が、どんな病気かもわからないままお引き受けしました。

数日後、「ご挨拶と楽譜を届けに行きます」と、白鳥会からお電話を頂きました。それが私と村上さんとの出会いでした。体調が悪いにも関わらず、わざわざ拙宅にお越しくださいました。その時初めて「低肺」というものがどんな症状なのかを知りました。

村上さんはこの時「私たちは、いつも精一杯呼吸をしているので、自然の土や草の匂いを人一倍感じる事が出来るのです」と話してくださいました。

リサイタル直前のピリピリした神経の中で、何気なく練習していた「明日の空へ」でしたが、その一言で、大切な歌を軽く歌っていた自分がとても恥ずかしくなりました。

「リサイタル前の大変な時期にごめんなさいね」と、逆に励ましを頂き、当日は白鳥会の会員の方もわざわざ聴きにきてくださいました。

病気を抱えながら、何故こんなに私を応援してくださるんだろう・・・と、嬉しいながらも疑問でした。「たった一曲歌うだけなのに・・・」

でも、翌日の総会で「明日の空へ」を歌い疑問が解きました。「私がこの曲を歌うことによって患者さんの心を、病気を多くの人に語らなくてはいけないのだ」と痛感しました。

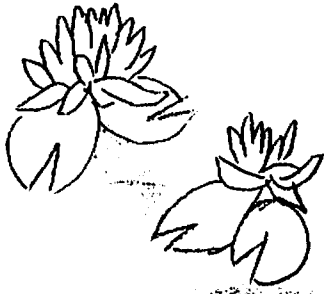
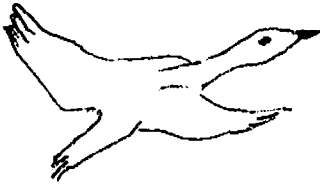
私はこの曲は、神様が私に与えてくださった曲だと思えました。村上さんと私が出会う為に作られた曲だと思えました。この曲を通して多くの方と出会い、チャリティーコンサートを開催できるようになり、ここでまた、多くの音楽家を通して「低肺」を理解していただく機会が増えました。

コンサート準備で大変な時も、いつも村上さんは私を励まし、勇気付けてくださいました。「船は出港してしまっただから、途中で降りられないのよ」と。

村上さんの笑顔、声、そして苦しそうに呼吸をしている姿、全てが私の脳裏に焼きついて離れません。

私は、歌えなくなるまで「明日の空へ」を白鳥会の皆さんと歌い続けていきたいと思えます。

村上さんが教えて下さった、命を掛けた情熱と、温かさ、忘れられない思い出とともに。



仙台市 高橋 昭

村上さん長い間ご苦労様でした。衷心からお悔やみ申し上げます。

私との出会いはもう十年以上になりました。整形外科の阿部靖先生と共に、低肺の方々の施設（低肺ホーム）を造りた
いとお話から、一緒に関係機関を訪れたり模索を繰り返しました。未だ実現に至っておりませんが、村上さんは仙台市内
の中心部に建設して欲しいとの希望を持って居られました。

高齢化が進み一人で生活する様になった低肺の人々にとって、どんなにか必要に迫られている施設であることを身をもって
知って居られた方でした。また、市に働きかけて呼吸療法法の指導を毎年やるように努力なさったり、パルスオキシメーターの
貸与の実現にこぎ付けられました。

私は知的障害者の施設を持つ法人の理事長などを経験しており、また、幾つかの社会福祉法人の役員や、地域や行政がやっ
ている社会福祉協議会の役員などをしていきますので、福祉についてはそれなりの知識・経験を持っている関係で、白鳥会の顧
問ということになっていきますが、もとお力になれないかと日頃考えて居りました。しかしながら、私自身が呼吸器の障害「肺
気腫」になってしまったので活動自体余り出来なくなりましたので、一昨年暮れに興味でやっていた洋画の展覧会を、ク
リスマスチャリティー展として仙台市福祉プラザ二階で開催しました（セミプロです）。この時は村上さんと共催のような形に
なり、NHKや河北新報社にご一緒して下さいました。この時は村上さんと共催のようです。もちろん売上の一部と
白鳥会への募金も集めることが出来て喜んで貰ったことが忘れられません。何度も木下のお家にも通ってご相談やら打合せな
どもしましたが、最後にお電話にて仙台市の身体障害者福祉協会の評議員になって欲しいとの依頼があって、平成十六年度か
らの会議に出席していますが、村上さんの遺志を継いで何とかお役に立ちたいと考えて居ります。
人の一生は重荷を背負って遠い道を歩むが如し、私もこれからの人生をどのように生きたいと存じて居ります。

東北白鳥会会長村上きみ子様お亡くなりになり心からお悔やみ申し上げます。

気仙沼市 藤原 きよ子

今後まだまだお働き頂きたい療養者の皆様が各地に居られるのに、ただただ残念の言葉だけでございます。お亡くなりになられた会長様も、どんなにか心残りでもございましたでしょう。一生懸命お助け下さって居られたグループの皆様のご心痛いおばかりかとお慰めの言葉もございません。一六四号「白鳥」は、会長様の最後のお声と思ひ読ませて頂きます。今後白鳥会の発展と皆様の御健康をお祈り申し上げます。

青森県三沢市 伊藤 務

ここ数年、機関誌「白鳥」の読者欄に数回投稿をするようになってから、村上会長からお電話や総会の出席へのお手紙を頂くようになりました。今年も総会前に村上会長さんから総会に出席のお招きの電話を頂きましたが、家を留守に出来ない雑用が生じたので、今年も欠席させて頂きまして返事を致しました。その後、総会を欠席した私は、村上さんのことが大変気になり、欠席のお詫びをかねて六月三十日村上会長宅に電話を入れました。

村上さんだと思つて挨拶を交わす間もなく、「私は今会長宅の留守番をしている佐藤です、実は三日前の六月二十七日に亡くなりました」と、事の次第を話されました。佐藤さんとはしばらく電話で話を交わしているうちに、佐藤さんは最後まで介護に携わつてこられた村上さんへの思いから、哀しみと心の痛みが一度にこみ上げしだいに涙声になり、私個人も村上さんを失つた悲しみに深く誘い込まれました。

七月に入って間もなく、斉藤和子さんから会費の領収と手紙が添えられてきました。村上会長とは女学校の同級生のよしみで、白鳥会の経理を引き受けられ、佐藤洋子さんの献身的介護には頭が下がりましたと記載されてきました。

会長が未だ健在の頃、内気な私が勇気を出して村上さん宅に電話を入れると、良く電話を呉れたね・・・と喜びの声をあげられ、会長は私のことを理解しているように語られ、また何時でも構わないから電話を頂戴ね・・・携帯でもいいから待っていますよ・・・と論されるように話される声は今も耳に残っています。

会員の方々も、私と同じ体験と交流された方が大勢おられると思います。その村上さんが低肺に病む会員たちの諸問題解決のために、数々の関係機関に陳情を重ね、数々の成果と功績を残して呉れました。また、自分の実績を誇らず、唯自分に与えられた使命のため、残された命の灯火が燃え尽きるその時まで、会員の方々の心配をして下さった、稀に見る優れた偉大な指導者だと思います。約二十年近くの間白鳥の機関誌を通して、どんなにか励まされ慰められ、村上さんの面影を偲び感謝しな

がら旅立って逝かれた方々が沢山おられると思います。

先に世を去られた村上会長の心の支えとなられた方々、そして会員の方々が迎え待つ天国の門を村上さんは急ぎ足で通り、懐かしい友達と手を取り合い再会の喜びを共にしておられることと思います。

誰にとっても、村上会長を失った痛手は余りにも大きく、殊更に会長を力強く支え活動を共にされたスタッフやボランティアの方々に、会員の一人として深く感謝申し上げます、

村上きみ子会長のご冥福を心よりお祈り致します。

福島市 幕田 裕子

日常生活において息苦しさを感じていた頃、東北大学病院の第一内科の先生の紹介で村上さんにお会いしたのは、昭和六十二年頃だったと記憶しています。

楽に呼吸をして生きる為にはどうすれば良いか、頭の回転の早さと発想であらゆる事をテキパキとこなしていく人でした。片手に書類、もう一方の手にはボンベのカートを引き、市役所、当時の県庁、酸素屋さん、医局など訪問。またマスコミを通じて、幅広く協力理解をして頂きたいと訴え続けるのでした。

街頭募金の時ボンベのカートをしっかり握っている私に、持っていないなくてもいいのよ、私達には大事な物でも誰も必要としないから持っていく人はいないよと、自分のは無造作に置いて町行く人に呼びかけていました。

またある時は、濃縮器の酸素と、ボンベの酸素ではどちらがおいしいかと聞かれたことがありました。ボンベの酸素の方がおいしいと言うとそうだよねと、思いが同じだったのか、ニコニコしてうなずいてくれました。

当時は開発されたばかりの濃縮器で、マイルド四十という機械でしたので風ばかりが鼻にあたるのです。

福島の行政のたち遅れなど相談しますと、分かりやすい説明を電話で教えてくれ、さらに陳情書を郵送してくれました。

それを市議会に持参しますと、すばらしい出来ばえに誰が作成したのかと聞かれるほどでした。

おかげで内部疾患者にも、タクシー代初乗り運賃無料化が実現しました。その二年後には酸素の電気代補助も承認されて頂けるようになりました。

息苦しさは変わりませんが経済的に緩和されました。行動範囲も広くなり目新しい物を見る機会も増え気持ち豊かになり

ました。

最後にお会いしたのは平成十四年五月三十、三十一日でした。ね、福島の家に来てくださり、水芭蕉、カタクリ、ひめ小百合などの花に囲まれ、緑の酸漿を胸いっぱい吸っていた姿が忘れられません。

白鳥会と会員を思う気持ち強く、亡くなった会員の事を話す時は声をつまらせ、戦友という言葉を使っていました。もう戦友とは再会しましたか？

村上さん！いろいろ教えて頂いて本当に有り難うございました。感謝しています、ゆっくりお休み下さい。

“長い間ご苦勞さまでした 有り難う”

東北白鳥会 大友 良

村上会長は常に白鳥会のことを大事にし、活動はハードスケジュールだった。京都の会議でも厚生大臣陳情を計画し、仙台を朝早く出発東京に下車、陳情した。京都駅に降りた時は夜の九時に近かった。それでも会長は「今日は津島大臣に直接陳情できてよかった」ととても嬉しそうだった。宮城県議会に低肺者の救済を請願した時も、県議会を傍聴し採択後は浅野宮城県知事にその実施を陳情、さらに県政記者クラブで説明をする。呼吸不全者が、自らこのようなハードスケジュールをこなしていた。

京都でホテルの朝食後新幹線に乗るまで、二時間ほどの時間ができた。私がどこか一つ見に行きませんかと声をかけると、暫く考えて「高台寺に行きたい」と返事。高台寺は美しい境内、古代文化の建物、気品漂う壮麗な仏像など仏教美術に歴史を感じる由緒あるお寺だった。会長は仏像の前で合掌、暫く動こうとしない。仏像の慈悲深いお顔を見ると無心になり、心が癒されると。また帰り道に庭園に立って、ゆっくりと時が流れて行くのを感じるとも言われた。歴史に強い興味と知識を持つ人だった。

会長が入退院を繰り返し返すようになって、時々「疲れた」と言っていてワープロの手を休める。また「一寸具合が悪い」と言っている机の上に顔を埋めることがあった。私は何度か「無理しないで、ゆっくり休んで」と休養を勧めた。その後ドクターストップとなり総会を欠席した。それでも「陰の部屋でも見ていたかったが、許されなかった。残念」とFAXを送って来ている。亡くなる十日ほど前に病院を訪れ、そっとドアを開けると会長と視線があった。幸い私の訪問を喜んでいて、笑顔で

浮かべていた。ベットの傍にいくと手を差し延べ「有り難う」と言った。私も「元氣な顔を見て安心した」と応えた。白鳥会のことを心配し、会報・患者団体連合会・老人学術会議・パルスオキシメーター・予防ワクチン等話しかけてきた。私は意外に元氣な様子に安心し「早く元氣になって」と別れた。数日後再び病院に行ってみた。会長の顔色が少し赤く、握った手は温かく感じられた。お見舞いを申し上げ帰ろうとした私に「本当にお世話になったね。これからも白鳥会を助けて、私は不死鳥よ」と祈るような顔で話をされた。私は「大丈夫、心配しないで。皆で会長が帰るまで頑張るから」と答え、一抹の不安を胸に帰った。そして、その三日後に帰らぬ人になってしまった。誠に悲しくて、辛く思えてならない。

二十四時間酸素を吸い、それでも息切れで苦しい体、さらに多臓器疾患で痛む体に鞭打って、低肺患者の救済活動に献身的に努力し、自らの生涯を捧げた壮絶な人生だと思ふ。三級の医療費助成、パルスオキシメーターの給付、呼吸器教室の実施等成果を上げているが、肝心の障害者二級の問題が残っている。会長があつた体・病状で障害者三級、要介護二級とはあまりにも酷いと思ふ。これらの解決を見ないままの死は、無念だつたらうに思うと涙が止まらない。私も白鳥会の支援活動で辛いことがあつたが、多くのことを教えられたように思っている。時を呼び戻せるなら、美しい花が咲き、小鳥が囀り、そよ風の吹く豊かな自然で包んで上げたい。そして、美味しい空気をいっぱい吸わせてあげたい。低肺者が高齢化し重症化する中で、命懸けで努力する姿、豊富な知識と経験で優しく親切に患者の相談を受ける姿を、再び見ることができない。重い病氣ゆえ、何時かは別れの日が来るとは思いつつ、本当に悲しい別れとなつた。村上きみ子会長のご冥福を、心からお祈りします。

友人代表 半沢 健

” 弔 辞 ”

村上さん！ ついこの間、私に下さつた手紙に「今はしゃべれないけど、不死鳥、火の鳥」のように頑張つて二、三カ月したら又皆さんにお目にかかるのだ」とおっしゃつていたではないですか。

あんなに氣丈だつた貴女、どんなにか悔しい思いで旅立たれたのかを思うと胸が痛みます。

私が、しばらく振りに同窓会でお会いして「白鳥会の仕事を手伝つて」と頼まれて、丁度二十年になりますね。木の下のお宅にも随分と通いましたし、陳情や何かで一緒にした事も度々でした。

一昨年厚生省に陳情に行つたとき、三塚代議士の秘書の方に国会議事堂を案内していただき、一番偉い警備員の方が特別に

総理大臣の席など見せて下さった事、貴女は車椅子でとてもご機嫌でした。議事堂の中に「酸素ボックス」があるのを見てやはりあったのだと納得しましたね、今は忘れられない思い出となりました。

又随分前の事になりますが、どこかに行った帰り道「早くタクシー拾いなよ」と言つと「あなたと歩いていると楽しいからもう少し歩いてからタクシーに乗るわ」と言つてしばらく一緒に歩きましたね。あの頃はともお元気で白鳥会のお仕事を一手に引受け、四方八方声掛けして低肺運動に専念して居られました。

今年の総会にはどうしても立ち上がれなくて、メッセージを下さいましたが「気持ちはいつも天を駆ける駿馬のように高揚しており、会員の皆さんお一人お一人のことに思いを走らせて、そして全国の仲間が安心して呼吸が出来るようにひたむきに活動を続けてきた」と述べておられます。

会員の皆様から信頼され期待され、他の低肺グループからも頼りにされ、ご自分の身体を酷使しようとう帰らぬ人となられました。

でも貴女の功績は厚生労働省にも知られ、仙台市や宮城県が低肺対策日本一というほどの施策を講じて下さった事です。

ドナーカードの普及の時も必死で頑張りましたよね。

国・県・市の多くの議員の方々が、耳を傾け手をさしのべて下さったこと、たくさんのお医者さまもご支援下さいました。

そしてボランティアの皆様が、手足となって貴女を支えて下さったこと、大勢のお友達も手伝って下さいました。最後まで親身になってお世話して下さい下さった洋子さん、「私のエンゼルよ」と言つて感謝していましたが、そういう事で貴女はとても幸せだったのだと思います。

白鳥会の事はもう気になさらずに、どうか安らかにお眠り下さい。

仙台市 斎藤 和子

「村上さん！まよゆうなら」

六月二十七日、輪王寺のお茶会に参席していた時呼び出しを受け「あーとうとう・・・」と全身の力が抜けていってしまいました。

貴女から「低肺機能者のために救済運動に取り組んでいるので手伝って」と言われ、微力ながらお手伝いを始めて十数年に

になりました。

NHKの黒岩記者のリポートを見てゼロからの出発でした。表に出たがらない患者さんとその家族を説得し、東北白鳥会を発足させました。まだワープロ、コピー、携帯電話等一般に普及していない時代でしたので、本当に大変でした。

厚生大臣への陳情、署名活動、街頭募金等々ご自分が息切れの身体でありながら、生活は白鳥会の運動に明け暮れました。

自身が低肺患者であるが故に、陳情に行っても説得力があり話を聞いて頂き、受け入れられ支援して頂く事が出来たのだと思います。

常に会員と接し、慰めたり励ましたり種々の相談にのり、何事も勉強し、豊富な知識をもって適切なアドバイスをして下さいました。

又、会の活動資金も、尺八の宮澤寒山先生始め在仙の一流の先生とそこ一門の方々か、チャリティー会を開いて毎年多額のご援助を頂きました。

それから仙台グリーンライオンズクラブ、卸町団地支援会からもご支援頂き、貴女はその度に手を会わせ、「有り難いわね、ありがとうございます」と感謝していらっしやいました。

私は万分の一位しかお手伝い出来ませんでした。貴女から有形無形の教えを受けました。ありがとうございます。晩年は佐藤洋子さんに手厚く看病を受けて安らかに旅立たれました。ふくちゃんや、新さんのもとに・・・

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。